

図 書 紹 介

John F. Cady: *Southeast Asia—Its Historical Development*. McGraw-Hill, New York, 1964. xvii+657pp.

著者は約30年の研究歴を有するアメリカにおける東南アジア専門の歴史学者で、現在 Ohio 大学の歴史学教授。The Roots of French Imperialism in Eastern Asia, (1954) や、A History of Modern Burma, (1958) などの近代史関係の著述もあるが、本書は数少ない東南アジア史の概説書として頗る注意に値するものである。

内容は本文が6部、26章よりなり、末尾に主要事件の地域別年表と、重要文献目録を附している。第一部“Setting”は序論と称すべきもので、その第一章においては、東南アジアの地形的特徴を概観し、それが民族移動の方向や、交通・貿易、文化・政治の発展に及ぼす影響を述べるとともに、季節風や雨の降り方と農業との関係、耕法を異にする平野・山地民族の併存とその歴史的意義、さらに東南アジア史上においてかつて指導的役割を演じ、また現に演じつつある主要民族の文化的な特質、共通性、相互関係を説き、次章においてはシナ・インドとの経済的文化的交渉の問題をとりあげ、双方文化のこの地域に及ぼした歴史的影響の強弱とその理由を検討し、とくに初期において著しい影響を及ぼしたインド文化の性格、この地域のインド化の過程、その受容の仕方を考察している。第二部以下は本論というべきもので、第二部“Early Empires”では、4章にわたり扶南・シュリヴィジャヤとジャワ・カンボディア・パガン（ビルマ）などを中心に、概ね1世紀から13世紀ごろまでに興亡した主要諸国の政治・社会・文化について述べ、第三部“Transition to Modern Times,”の3節では、東南アジア史上でも大きな影響を及ぼしたモンゴル族の侵入からポルトガルの進出までの激動期を扱い、その間においてインドシナ半島に覇を唱えたタイ族の国々や、ジャワにおけるマジャパイト王国、さらにイスラム教国マラッカにおける東西貿易の発展とジャワなどにおけるイスラム化進行過程について述べている。次いで第四部、

“European Commercial Dominance”の6章では、17世紀から19世紀の中葉までのオランダ、スペイン、イギリスなどの商業活動を中心に、ビルマ、タイ、ヴェトナムの政治、文化についても述べられ、また第五部、“Intensive Economic Development”の5章では、19世紀から20世紀にかけてのジャワ、ビルマ・マラヤ、ヴェトナムに対する統治国オランダ、イギリス、フランスなどの植民地政策とそれによる経済的発展について、さらに最後の第六部、“Political Reform and Nationalist Revival”の7章では民族運動の発展を中心に、20世紀の東南アジア諸国の政治について述べ、第二次世界大戦中における日本の占領、戦後における独立諸国の動向、将来の展望に及んでいる。

本書は概説書であるが、史実の羅列的叙述でなく、常に因果関係を考え、とくに東南アジアの地域性を重視し、この地域とシナ・インド・西南アジア・ヨーロッパなど先進地域との経済的文化的関係に注意している。また先年刊行されたイギリスの D.G.E. Hall 教授の“A History of South-East Asia” (1955) 以後における最新の研究成果をも多くとり入れ、概説書としてよく纏っている上に、各所に関係の地図を挿入して読者の理解を助けている。東南アジア史の入門書として好適の著作と言えるであろう。（藤原利一郎）

Bennington-Cormell : *Anthropological Survey of Hill Tribes in Thailand; A Report on Tribal Peoples in Chiengrai Province North of the Mae Kok River, The Siam Society Under Royal Patronage, Bangkok, 1964.*

1963年から64年にかけて、約8か月間、Bennington College と Cornell 大学が合同で北部タイにおける山地部族（hill tribes）の人種・生態学的な調査研究（実質的な現地調査は5か月）を行ない、Bennington College の Lucien M. Hanks および Cornell